

## 編集後記



2012年を振り返ると、東日本大震災以降、1年以上が経過していくなか、被災地域が広範であることや制度的な問題もあり、なかなか復興が進みませんでした。震災をさらに悲惨な状況にした福島原発の事故処理は、引き続き懸命な除染作業が続き、今後も莫大な手間と年月を要することでしょう。

今は既に地震活動期にあると言われますが、3.11以降、この2013年3月までに、日本のどこかで震度5弱以上を記録した地震は80回以上にものぼり、大震災の発生が予測される地域においては、防災・減災に対する一層の取り組みが重要となります。

折しも、3月18日には内閣府が南海トラフ巨大地震の被害想定(二次報告)を公表し、最悪のケースの想定とはいえ、その経済的被害の大きさに驚きました。内閣府では首都直下型地震対策WGでも対策を進めていますが、中部・近畿圏の直下型地震についても安全というわけではありませんし、加えて、毎年のように発生する風水害のことを忘れてはなりません。

一方で2012年は、ノーベル生理学・医学賞を山中教授が受賞したこと、東京スカイツリーの開業、またロンドン五輪ではメダル総数において過去最高の38個を獲得するなど、明るいニュースもありました。2020年の東京オリンピック招致も熱を帯び、前回16年の開催支持率を大幅に上回っていることは好感でき、今後が注目されます。

さて、機関誌「土と岩」の本61号では、私たちが地質調査をする上で大変重要である地形判読について、さらに知見を深めるべきであるという観点から「地形を読む」という特集を企画いたしました。

大久保理事長の巻頭言にあるように、国土強靱化計画が進む中、新規のインフラ、そして老朽化するインフラに対して、地質調査業の責務はこれまで以上に重く、一層の研鑽が必要であり、本誌がその一助となれば幸いです。

今、編集委員会では、寄稿していただいた皆様の原稿や全体の組み立てについて、ミスのないように最終校正の段階にあり、5月には皆様のお手元にお届けできると思います。またホームページについては、外向きの情報発信だけではなく、協会員にも役立つ機能が高まり、これからも内外に向けて有用なものを目指したいと考えています。

最後になりますが、ご多忙にもかかわらずご寄稿いただきました執筆者の皆様、日頃より大変お世話になり意見交換会にて貴重なご意見を賜りました国土交通省中部地方整備局の皆様、上部団体の全地連の皆様を始め、本機関誌発刊にご尽力をいただきました皆様に心より感謝申し上げます。

今後とも「土と岩」が皆様方から愛読され続けますよう努力してまいりますので、ご指導、ご愛顧をお願い申し上げます。

編集委員会